

汉日对照

芥川龙之介

短篇小说集

(日) 芥川龙之介 著
蔡鸣雁 译

犀利冷峻的笔锋，嬉笑怒骂的文字，
人性深处的善恶，错综复杂的情感……
芥川龙之介经典再现



大连理工大学出版社

014037474

芥川龙之介

短篇小说集

H369.4:I
30



大连理工大学出版社



北航

C1725754

H369.4:I
30

图书在版编目(CIP)数据

芥川龙之介短篇小说集: 汉日对照 / (日) 芥川龙之介著; 蔡鸣雁译. —大连: 大连理工大学出版社, 2014.3

ISBN 978-7-5611-8296-3

I. ①芥… II. ①芥… ②蔡… III. ①日语—汉语—对照读物 ②短篇小说—小说集—日本—现代 IV. ①H369.4; I

中国版本图书馆CIP数据核字(2013)第248944号

大连理工大学出版社出版

地址: 大连市软件园路 80 号 邮政编码: 116023

发行: 0411-84708842 邮购: 0411-84708943 传真: 0411-84701466

E-mail: dutp@dutp.cn URL: <http://www.dutp.cn>

大连力佳印务有限公司印刷

大连理工大学出版社发行

幅面尺寸: 145 mm × 210 mm

印张: 9

字数: 202 千字

印数: 1~4000

2014年3月第1版

2014年3月第1次印刷

责任编辑: 海迎新

责任校对: 邓 颖

封面设计: 董振巍

ISBN 978-7-5611-8296-3

定价: 20.00 元

译者前言

盛极将衰、此消彼长，中国《易经》的学说某种意义上同样适用于日本文学思潮的推进和文学流派的更迭。20世纪初，倡导“理想主义、人道主义”的“白桦派”在辉煌之后渐渐开始被质疑流于理想主义的主观与空泛。在这样的背景之下，以芥川龙之介、菊池宽等作家为代表的“新思潮派”开始登上日本文学史的舞台。他们大张旗鼓地倡导自我，将冷静而理性的目光投向现实的人生，以独特的视角审视人性，主题鲜明、注重技巧。

芥川龙之介（1892-1927）出生于东京一个商人家庭，其出生九个月时，母亲精神失常并终老未愈。因此，芥川自幼便被寄养于舅父家中，以养子的身份长大成人。芥川养父芥川道章是母亲的兄长，时任东京府的土木科长。芥川家是大家族，世代担任江户城的茶会吏一职，其家族作风严厉但博学多识，具有浓重的文人气息。芥川家乃延续十几代的士族，门风高尚，子弟均修习文学、演艺、美术等艺术科目。芥川全家皆谙游艺（茶道、插花、舞蹈、音乐等的总称），道章擅南画、俳句，爱盆栽，芥川的养父母及姨妈都爱好文学。在家庭浓厚的古典氛围熏陶之下，芥川自幼熟读汉日各类书籍并开始逐渐显露其非凡的文学才华。芥川的文学爱好

自然不会遭受喜爱文学的家人阻挠，但其不幸的初恋却因受到养父母的强烈反对抱憾终止。1927年，芥川龙之介因“恍惚的不安”自杀，日本文学界一颗独放异彩的明星就此陨落，令人徒然扼腕。芥川天资聪颖，而他的成长经历使其涉猎广泛、博学多才却又多愁善感，在日本文坛负有“鬼才”盛名。纵观其短短十几年的文学创作生涯，留下了149篇小说、66篇随笔、55篇小品文及诸多评论、游记、札记、和歌等作品。

1913年，芥川龙之介的处女作《老年》发表，却并未在日本文学界引起波澜，直至1915年，《罗生门》这篇短篇小说问世之后开始受到日本文坛的瞩目，其后的短篇小说《鼻》受到夏目漱石的赞赏，芥川借此正式步入日本文坛。芥川的作品题材广泛、文笔细腻华丽、文章立意独特、构思缜密，虽有刻意雕琢之嫌，却能引起读者对人性与现实的深刻反思。芥川龙之介幼年广泛涉猎汉日古典书籍，熟谙中日两国的传统文化，而其大学期间的主攻专业却选择了英文，他倡导艺术至上却不得不因现实的窘迫而苦恼。其广博的知识、东西方文化思想对他的影响均在他日后的作品中有所反应，一如他矛盾重重却又丰富多彩的人生。

芥川龙之介的作家生涯大致可以分为早、中、晚三个阶段。芥川早期的作品（1916-1920）多以历史小说题材为主。出于知识分子的骄傲，芥川抗拒自我告白式的写作方式，转而将目光投向历史题材。芥川自幼博览汉日古典书

籍，他熟读中国古代文学作品，如《聊斋志异》《水浒传》《三国志》《琵琶行》，芥川同样熟谙日本古典，如《今昔物语》《宇治拾遗物语》《十训抄》，等等。芥川的小说很多取材于这些古典作品，比如《罗生门》《杜子春》《黄粱梦》，等等。本书收录的《酒虫》即取材于《聊斋志异》。

芥川的历史题材小说绝不仅仅是历史典故的演绎和历史人物的翻拍，其真正的着眼点在于借古喻今、针砭时弊，其冷峻的笔锋常常直指人性的丑恶与矛盾，犀利而深刻。他试图通过历史故事探索现代人的精神状态及生命窘态。例如，《酒虫》中的刘大成，究竟甘愿在欲望中沉沦还是选择借助外力实现自我的救赎？酒虫的寓意究竟是什么？所谓“酒虫”，到底是主人公的福还是他的孽？而现代人的生命状态又何尝不是处于类似的窘迫之中？作品的解读留待读者在阅读中见仁见智。芥川中期的创作（1920—1924）不再单纯流连于古典作品，而是开始将目光转向现实世界，这个时期可以称之为其从历史小说到自传式小说的过渡时期。这个时期的作品很多取材于现实，如《蜜柑》《秋》《将军》《一块土》《南京的基督》，等等。本书收录的短篇小说《秋》描写了青年知识分子的恋爱，纠缠着情感、欲望与道德层面的矛盾与挣扎。《南京的基督》取材于芥川龙之介的中国旅行，被女主人公金花视为救赎的所谓基督实际上是一位企图赖掉嫖资的无赖记者，小说充满了戏剧性的起伏，美好的愿望遭遇现实的丑恶与无情，读来令人在讽刺中不寒而栗。到了芥川创作

的晚期（1925—1927），由于身体每况愈下，数重疾病缠身，加之母亲发疯的阴影一直在他的心里挥之不去，死亡的阴霾开始逼近芥川的生活与创作。同一时期，第一次世界大战爆发，受到风起云涌的大时代背景的影响，无产阶级文学登上历史舞台，芥川龙之介等人被批评为“资产阶级作家”，芥川在文学创作上承受着前所未有的压力。一方面，他认为应该有充分的理由相信未来属于社会主义，另一方面他又不肯放弃对“精神的自由”的执着追求。在艺术思想上，芥川感受到空前绝后的苦闷与彷徨。这个时期，他的主要作品开始带上了明显的自传倾向，如《少年》《大导信辅的半生》《点鬼簿》《一个傻子的一生》，等等。

芥川龙之介是一个艺术至上主义者，他以娴熟的手法轻松地驾驭各种体裁的作品，收获了艺术上的成功。而对艺术近乎变态与苛刻的追求也构成了他文学作品的主要题材之一，面对质疑与非难，他在小说《戏作三昧》中给出了明确的答复，《戏作三昧》的主人公马琴面对毁誉褒贬时也曾动摇，但他“每当伏案，利害爱憎皆烟消云散，转而便能进入戏作三昧的境界”，这也可以看作是芥川龙之介艺术至上主义的宣言。如果说《戏作三昧》中的主人公马琴痴迷于戏剧创作，达到无我无他的境界，尚属世人可以理解的范畴，那《地狱变》的主人公、画师良秀对艺术近乎变态的痴迷与执着则让人感受到肝胆俱裂般的震撼。为了艺术，良秀放弃亲情，背弃人伦与人性，在女儿被活活烧死的瞬间只顾着如痴

如醉地埋头描绘一幅惨绝人寰却又凄美无双的旷世杰作，人性、伦理、道德、生命……一切的一切在艺术面前统统变得无足轻重，读来不禁令人惊心动魄。

对人性“恶”的揭露与鞭笞则是芥川龙之介文学作品的另一主要题材。《鼻》中的老和尚身在佛门，本应“四大皆空”，却因为长着怪异的鼻子而如芒在背、耿耿于怀，无法超脱自我，人性的自私让读者感受到无限的讽刺。其成名作《罗生门》更是将人逼到生死抉择的极限境地来拷问人性，让人性的“恶”在极限中无处遁形。通过这些作品，芥川龙之介以冷峻的笔触揭示了隐藏在人性深处的自私与丑陋、虚妄与软弱，也让人深入地思考人性中诸多本该泾渭分明却暧昧模糊、错综复杂的情感纠葛，比如，自卑与自尊、同情与幸灾乐祸、善与恶，等等。芥川试图通过文学传达自己对人性的理解。本书中收录的《秋》《毛利先生》《父亲》《疑惑》都属于这一类的作品。以《疑惑》这篇小说为例，主人公中村玄道的妻子在地震火灾中不幸被倒塌的房梁压住动弹不得，眼见着即将被烧死，面对向自己伸出求生手臂的妻子，中村玄道在施救无果的情况下残忍地亲手将妻子杀死，之后却不得不长期忍受来自心灵的拷问与苛责。在芥川笔下，善恶往往存在于人的一念之间，往前一步是地狱，退后一步或许就是天堂，而在被逼到极限的情况下，人性却总是选择在闪念之间迈向地狱。

作为本书的译者，在翻译的过程中跟随着芥川龙之介犀利而冷峻的笔锋游走于题材丰富的故事中，感受着复杂的人性在芥川嬉笑怒骂的文字中被逼得无以遁形，于我则心有戚戚焉。在本书即将付梓之际，我想借此机会对我的恩师林少华先生致以我的感激之情，先生以严谨的治学态度引领我走上文学翻译的道路，让我在翻译的苦与乐中收获着成长的喜悦，希望本书的出版能略慰先生的培养之心。

蔡鸣雁

2013年12月

目 录

父/父亲	1
酒虫/酒虫	17
毛利先生/毛利先生	43
沼地/沼地	87
疑惑/疑惑	95
秋/秋	137
黒衣聖母/黒衣圣母	175
或敵打の話/一个复仇的故事	191
南京の基督/南京的基督	225
捨兒/弃儿	261

父

自分が中学の四年生だった時の話である。

その年の秋、日光から足尾^{あしお}へかけて、三泊の修学旅行があった。「午前六時三十分上野停車場前集合、同五十分発車……」こう云う箇条が、学校から渡す^{とうしゃばん}膳写版^{すりもの}の刷物に書いてある。

当日になると自分は、碌^{ろく}に朝飯^{あさめし}も食わずに家をとび出した。電車でゆけば停車場まで二十分とはかからない。——そう思いながらも、何となく心がせく。停車場の赤い柱の前に立って、電車を待っているうちも、気が気でない。

生憎^{あいにく}、空は曇っている。方々の工場で鳴らす汽笛^おの音が、鼠色^{ねずみいろ}の水蒸気をふるわせたら、それが皆霧雨^{きりさめ}になって、降って来はしないかとも思われる。その退屈な空の下で、高架鉄道^{こうか}を汽車が通る。被服廠^{ひふくしょう}へ通う荷馬車が通る。店の戸が一つずつ開く^あ。自分のいる停車場にも、もう二三

人、人が立った。それが皆、眠^ねの足りないような顔を、陰気らしく片づけている。寒い。——そこへ割引の電車が来た。

こみ合っている中を、やっと吊皮^{つりかわ}にぶらさがあると、誰か
うしろ
後から、自分の肩をたたく者がある。自分は慌^{あわ}ててふり向
いた。

「お早う。」

見ると、能勢^{のせいそお}五十雄であった。やはり、自分のように、
紺のヘルの制服を着て、外套^{がいとう}を巻いて左の肩からかけて、
麻のゲエトルをはいて、腰に弁当^{つづみ}の包やら水筒やらをぶら
さげている。

能勢は、自分と同じ小学校を出て、同じ中学校へはいっ
た男である。これと云って、得意な学科もなかったが、そ
の代りに、これと云って、不得意なものもない。その癖、
ちょいとした事には、器用^{た　ち}な性質で、流行唄^{はやりうた}と云うような
ものは、一度聞くと、すぐに節を覚えてしまう。そうし
て、修学旅行で宿屋へでも泊る晩なぞには、それを得意に
なって披露^{ひろう}する。詩吟^{しぎん}、薩摩琵琶^{さつまびわ}、落語、講談、声色^{こわいろ}、手
品^{しな}、何でも出来た。その上また、身ぶりとか、顔つきとか

で、人を笑わせるのに独特な妙を得ている。従って級の^{クラス}気
うけも、教員間の評判も悪くはない。もっとも自分とは、
互に^{ゆき き}往来はしていながら、さして親しいと云う間柄でもな
かった。

「早いね、君も。」

「僕はいつも早いさ。」能勢はこう云いながら、ちょい
と小鼻をうごめかした。

「でもこの間は遅刻したぜ。」

「この間？」

「国語の時間にさ。」

「ああ、馬場に^{しか}叱られた時か。あいつは^{こうぼう}弘法にも筆のあや
まりさ。」能勢は、教員の名前をよびすてにする癖があった。

「あの先生には、僕も叱られた。」

「遅刻で？」

「いいえ、本を忘れて。」

「^{じんたん}仁丹は、いやにやかましいからな。」「仁丹」と云う
のは、能勢が馬場教諭につけた^{あだ な}渾名である。——こんな話
をしている中に、停車場前へ来た。

乗った時と同じように、こみあっている中をやっと電車から下りて停車場へはいると、時刻が早いので、まだ^{クラス}級の連中は二三人しか集っていない。互に「お早う」の^{あいさつ}挨拶を交換する。先を争って、待合室の木のベンチに、腰をかける。それから、いつものように、勢よく^{しゃべ}饒舌り出した。皆「僕」と云う代りに、「^{おれ}己」と云うのを得意にする^{ねんぱい}年輩である。その自ら「^{おれ}己」と称する連中の口から、旅行の予想、生徒同志の^{ひんしつ}品隲、教員の悪評などが盛んに出た。

「泉はちゃくいぜ、あいつは教員用のチョイスを持っているもんだから、一度も下読みなんぞした事はないんだとさ。」

「平野はもっとちゃくいぜ。あいつは試験の時と云うと、歴史の年代をみな^{つめ}爪へ書いて行くんだって。」

「そう云えば先生だってちゃくいからな。」

「ちゃくいとも。本間なんぞは receive の i と e と、どっちが先へ来るんだか、それさえ^{ろく}碌に知らない癖に、教師用でいい加減にごま化しごま化し、教えているじゃあないか。」

どこまでも、ちゃくいで持ちきるばかりで一つも、碌な噂は出ない。すると、その中に能勢^{うち}が、自分の隣のベンチに腰をかけて、新聞を読んでいた、職人らしい男の靴^{くつ}を、パッキンレイだと批評した。これは当時、マッキンレイと云う新形の靴^はが流行^{はや}ったのに、この男の靴は、一体に光沢^{つや}を失って、その上先の方がぱっくり口^あを開いていたからである。

「パッキンレイはよかった。」こう云って、皆一時^{いちどき}に、失笑した。

それから、自分たちは、いい気になって、この待合室に出入^{しゅつにゅう}するいろいろな人間を物色しはじめた。そうして一々、それに、東京の中学生でなければ云えないような、生意気な悪口を加え出した。そう云う事にかけて、ひけをとるような、おとなしい生徒は、自分たちの中に一人もない。中でも能勢の形容が、一番辛辣^{しんらつ}で、かつ一番諧謔^{かいぎやく}に富んでいた。

「能勢^{のせ}、能勢、あのお上^{かみ}さんを見ろよ。」

「あいつは河豚^{ふぐ}が孕^{はら}んだような顔をしているぜ。」

「こっちの赤帽も、何かに似ているぜ。ねえ能勢。」

「あいつはカロロ五世さ。」

しまいには、能勢が一人で、悪口を云う役目をひきうけるような事になった。

すると、その時、自分たちの一人は、時間表の前に立って、細い^{こまか}数字をしらべている妙な男を発見した。その男は羊羹色^{ようかんいろ}の背広を着て、体操に使う球竿^{きゅうかん}のような細い脚を、鼠の粗い縞のズボンに通している。縁^{ふち}の広い昔風の黒い中折れの下から、半白^{はんぱく}の毛がはみ出している所を見ると、もうかなりな年配らしい。その癬頸^{くび}のまわりには、白と黒と格子縞^{こうしじま}の派手なハンケチをまきつけて、鞭^{むち}かと思うような、寒竹^{かんちく}の長い杖をちよいと脇^{わき}の下へはさんでいる。服装と云い、態度と云い、すべてが、パンチの挿絵^{さしえ}を切抜いて、そのままそれを、この停車場の人ごみの中へ、立たせたとしか思われぬ。——自分たちの一人は、また新しく悪口の材料が出来たのをよろこぶように、肩でおかしそうに笑いながら、能勢の手をひっぱって、

「おい、あいつはどうだい。」とこう云った。

そこで、自分たちは、皆その妙な男を見た。男は少し反り身になりながら、チョッキのポケットから、紫の打紐うちひものついた大きなニッケルの懐中時計を出して、丹念たんねんにそれと時間表の数字とを見くらべている。横顔だけ見て、自分はすぐに、それが能勢の父親だと云う事を知った。

しかし、そこにいた自分たちの連中には、一人もそれを知っている者がない。だから皆、能勢の口から、この滑稽な人物を、適当に形容する語ことばを聞こうとして、聞いた後の笑いを用意しながら、面白そうに能勢の顔をながめていた。中学の四年生には、その時の能勢の心もちを推測するめい明がない。自分は危く「あれは能勢ファザアの父だぜ。」と云おうとした。

するとその時、

「あいつかい。あいつはロンドン乞食こじきさ。」

こう云う能勢の声がした。皆が一時にふき出したのは、云うまでもない。中にはわざわざ反り身になって、懐中時計を出しながら、能勢の父親スタイルの姿を真似て見る者さえある。自分は、思わず下を向いた。その時の能勢の顔を見る